


海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	喬 志偉 
所属機関	国立がん研究センター研究所・希少がん研究分野
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	16th Human Proteome Organization World Congress
渡航期間	自 2017年9月16日 至 2017年9月23日
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	プロテオミクス技術の開発、がんのプロテオミクス最前線
<p>研究成果（要約：800字）</p> <p>16th Human Proteome Organization World Congress という学会に参加してきましたので、下記のとおりご報告致します。</p> <p>学会は大きな会場の中で行われ、世界中の基礎から応用までさまざまな研究者が集まりました。たくさんと同じ研究分野の研究者と活発な意見交換や議論を行いました。</p> <p>大会は最新のプロテオミクス技術の開発、がん分子標的治療薬の分子基盤と臨床応用、データベース・バイオインフォマティクス、タンパク質の翻訳後修飾、プロテオミクスの創薬への応用、precision medicine など様々な分野の企画がありました。特に、診断と予後のバイオマーカーの開発でのがん研究について、現在の研究状況や将来の展望など多数の講演がありました。</p> <p>Human Proteome Organization World Congress 学会は、最前線のプロテオミクス研究者の研究成果を発信する場です。この学会を通じて、世界各国の研究グループのがんのプロテオミクス研究の現状や進行中のプロジェクトなどを知りました。また、肉腫の研究について、分子標的薬の作用機序やプロテオミクス手法を用いた分子背景の解明など多数の演題がありまして、自分の研究に大変参考になりました。</p> <p>私は「肉腫においてパゾパニブの奏効性を予測するバイオマーカーの開発」というタイトルでポスター発表をしました。パゾパニブは肉腫の治療において承認された数少ない分子標的薬であり、20%以上の肉腫症例はパゾパニブに効かない現状である。自分の研究で見つけたパゾパニブの奏効性バイオマーカーを今回の学会を通じて、世界に発信できたと信じています。特に、当研究室で使った in vitro キナーゼ活性測定の手法は、世界中の同じ分野の研究者に注目され、様々な質問を受けました。大変有意義な発表でした。本大会で同じ分野の研究者と深く議論を行うことができ、大変勉強になりました。</p> <p>この学会中で収集した情報や学んだ知識は自分現在の研究に役に立つと思います。今後、この貴重な経験を生かしてよい研究を進めるように頑張りたいと思います。</p>	